

1. これまでの経緯

最初にこれまでの経緯を簡単に述べておきたい。2002年度に5年計画の日本国文部科学省の21世紀COEプログラムが開始され、愛知大学が申請した「国際中国学研究センター (International Center for Chinese Studies, 略称 ICCS)」がその1つとして採択された。COE-ICCSは大学院博士課程で研究者の養成を行うとともに、現代中国についての政治、経済、環境、文化、及び総括(方法論)に関する5つの研究会を発足させ、教育活動と研究活動を並行して行ってきた。その研究会の1つが環境研究会(正式名称:現代中国とアジア世界の人口生態環境問題研究会)であり、本稿の著者である私(榎根)は環境研究会の主査をつとめている。

環境研究会は、日本と中国の15~16名の環境関連分野の研究者で構成されており、国際シンポジウム、国際ワークショップ、国内シンポジウム、研究会、中国でのフィールドワーク等を随時実施している。これまでに行った研究活動の記録は、2冊の「中間報告書」等の印刷物として公表したほかに(愛知大学国際中国学研究センター, 2005; 同, 2006)、データベースとしてE-webでの公開も予定している。最終報告書は、2006年度中に印刷される予定である。環境研究会の活動を開始するにあたって、まず私は、環境研究会の目標を「環境改善技術の体系化」と定め、そのための方法論について「中国とアジア世界の環境問題に関する方法論的考察」(第1論文)で論じた。次に、「環境改善技術体系化の基礎」(第2論文)で体系化に必要な「新しい知」について暫定的なまとめ

を行った。そして、環境研究会の最終報告書の作成に向けて、「現代中国環境論への招待」(第3論文)を書き、環境研究会のメンバー全員に「現代中国環境論」の共同執筆への参加を呼びかけた。

これ以後、私は独自の研究活動に入り、環境研究会のリサーチ・アシスタントであった朱安新とともに「文理融合二人ゼミ」を開始し、麗江では環境研究会のメンバーの一人である宮沢哲男の参加も得てそれを「三人ゼミ」に発展させ、その成果を「自然と人間の統合——文理融合への1つの試み——」(第4論文)としてまとめた。麗江での調査は「麗江古城の水と社会」という表題で、榎根・宮沢・朱3人の連名で水の専門誌である『水利科学』(2006)に発表した。その「麗江古城の水と社会」の内容を、図や写真などを追加して、私の責任で拡張したものがこの「麗江古城の環境論」(第5論文)である。なお「麗江古城の水と社会」は、短期滞在者の印象記に近い予察的段階にある論文で、本格的な成果はこれから現地調査を行って積み上げていかなければならないと考えている。

2. 「第1論文」で提起した問題

第1論文では、以下の3つの問題提起を行った。

1) 経済的には後進地域に属する中国を始めとするアジア諸国にとって、「次なる社会システムA」とは異なる「次なる社会システムB」へ直接進む道はないのか。

先進工業国が目指す「次なる社会システムA」と、中国やアジア世界が目指す「次なる社会システムB」は同一でなければならないのか。も

し同一である必要はないとしたら、その「次なる社会システムB」とは何か。

- 2) 価値の問題を客観的に議論することはできないのか。できるとしたら、それはどのような方法によってであるか。
- 3) 環境と人間の問題に踏み込むには、人間と自然の関係性について、哲学と科学の両面から検討を行う必要があるのではないか。

環境問題は、環境に関する研究論文を書けば片付くという性質のものではない。第1論文～第4論文の結論は、古典物理科学に基礎をおく産業資本主義経済社会では、環境問題の発生は避けられないということであった。初期の環境問題は「物質」による自然界の汚染問題であったが、今後、社会のニーズが「もの」から「情報」へと変化しても、「情報」による「脳内汚染」が起こる可能性があり、すでにその危険性を指摘している研究者もある(岡田, 2005)。環境問題を超克するには、これまでとは全く異なる「新しい知」による「次なる社会システム」の構築が必要である。

しかし、極めて興味深いことに、上に提起した3つの問題について、20世紀末から21世紀初めにかけて、世界中で、同時に、何人かの研究者が、私と並行して、ほぼ同じことを考えていた。この事実は、暗い未来の予測しかなかった「環境」にとっては明るいニュースである。第4論文はそれらの考えを私なりにまとめたものである。以上で、私が最初に提起した問題に対する一応の結論が得られた。次のステップとして、私たちは、中国の環境問題について、独自の資料を収集して、環境改善技術について考えるためのフィールドとして、麗江を取り上げた。麗江を選んだ理由は、2005年8月の雲南省のフィールドワーク(概況調査)で、「新しい知」に基づいた「次なる社会システム」の構築を考える具体的な場所としては、麗江が最も適していると考えたからである。

3. 麗江古城について

中国雲南省の少数民族である納西(ナシ)族の誇り麗江古城は、1997年12月6日に世界文化遺産に登録された。甚大な被害が発生した雲南大地震の翌年のことであった。麗江古城のこの成功とは対照的に、麗江の南200kmたらずの場所で同じ目的のために準備中だった白族の城壁都市大理古城は、地震の被害の深刻さも一因で世界文化遺産への登録をあきらめた。両者の明暗を分けたのは、納西族文化と白族文化の間に見られる伝統の強さの差であったと考えられる。現在の麗江市の人口は約110万人、その内で納西族は23.4万人で、市域の面積は日本のどの県よりも広い。行政単位である「麗江古城区」では、1997年の時点で人口2万5300人のうち納西族が1万6900人であったが、現在では人口約3万5000人のうち納西族は1万人以下にまで減少している。北方の遊牧民だった納西族が、今から1200年以上前に、南下して麗江盆地で最初に定住した場所は玉龍雪山の麓にある白沙村だった(図1)。この村には玉水寨(図1の②)という豊富な水の湧き出す納西族の聖地がある(写真1, 写真2)。次に納西族が拓いたのが山裾の「泉の村」東河(別名龍泉村、同③)である(写真3, 写真4)。白沙古鎮と東河古鎮は世界文化遺産に登録された麗江古城の組成部分である。いま東河では古鎮を中核にしてテーマパーク「東河民俗村」の観光開発が進められている。彼らの3番目の開拓地が、茶馬古道の交易のまち麗江古城(同⑫と⑮の間)であった。ここにも象山から湧き出す水を貯める黒龍潭があり(写真5, 写真6)、古城区内には数ヶ所で泉が湧き出している。表流水の乏しい石灰岩地帯にあって、納西族は水の湧き出す土地を求めて開拓を続けてきたのである。

遊牧民が流れる大水と出合ったときに感じた大きな喜びは、インド・アリア人の聖典『リグ・ヴェーダ』によって今日まで生き生きと伝えられ

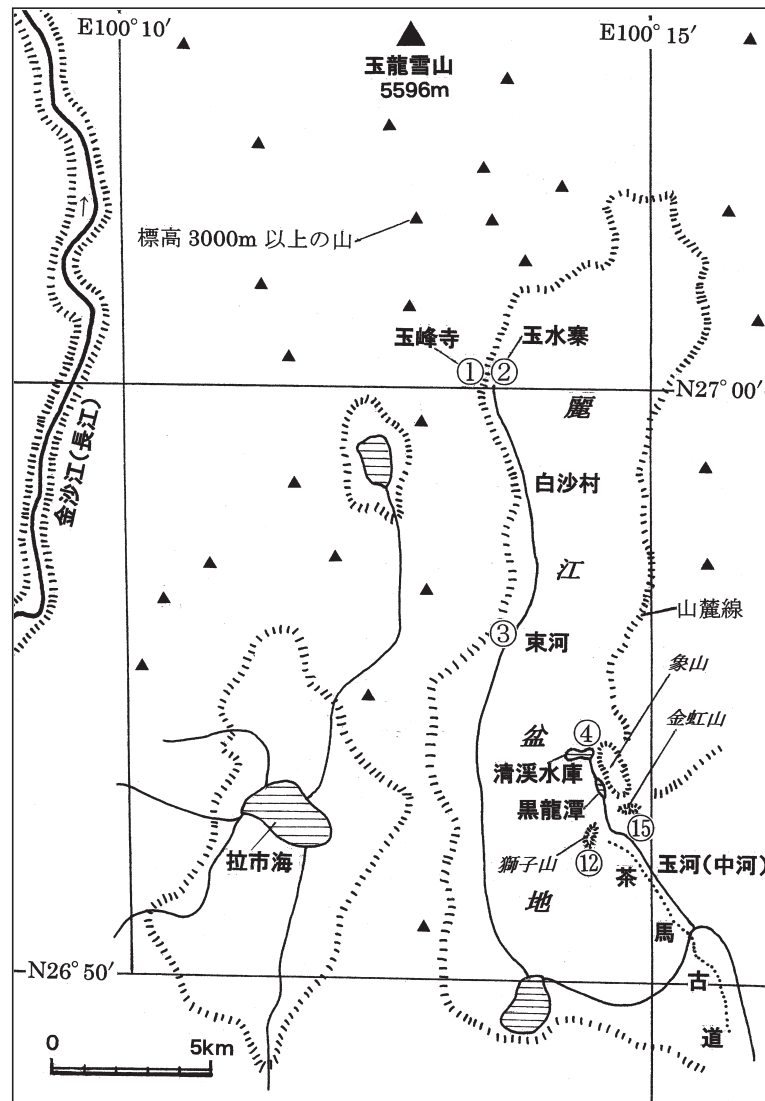


図1 麗江盆地周辺の概略図（榎根原図）



写真1 麗江玉水寨旅游風景区の看板、「古城溯源」の文字がある



写真2 玉水寨の神泉の水を受ける玉龍三疊水の文字がある



写真3 束河の源泉の1つである「九鼎龍潭」



写真4 束河茶馬古道鎮の水路



写真5 黒龍潭へ湧き出す湧水の1つ「珍珠泉」



写真6 湧水に供えられた花と線香

ている。それが古代インダス文明の始まりになったことについては『水と女神の風土』（榎根, 2002）で詳述したとおりである。後述するように、納西族の思想の根底には水の恵みに対する大きな感謝の念がある。納西族にとって水は神である。その思想は、最初から水の恵みを享受することのできた湿潤地域の民族の思想よりも、水への思い入れがはるかに強い。

私たちは2005年8月に2週間ほどかけて雲南省の概況調査を行った。2006年4月と7月に再度「麗江の水と社会」を対象に調査を実施した理由をキーワードで示すと、「水・環境・辺境・少数民族・納西族文化・自然と人間の調和・エコツーリズム」となる。この面積わずか3.8km²の狭い麗江古城へ、2005年には480万人の観光客が季節を問わず訪れたといわれる。都市の規模は2桁近くも違うが、京都は日本の麗江だとも、麗江

は中国の京都だともいわれる。麗江古城は、近代生活や都会生活に疲れた人にはとても心地よいまちなのである。まだ日本からの観光客は多くはないが、交通の利便性が増せば、若い女性を中心に急増するであろうことは間違いない。《人々はなぜ麗江に惹きつけられるのだろうか？ 麗江の魅力が失われることのないように、このまちの環境を健全に保持していくにはどうすればいいのだろうか？》これら2つの問いへの答え探しが、私たちに麗江古城を再度訪れさせた理由だった。

4. 全象限的アプローチ

私たちは「環境問題とは自然と人間の関係は如

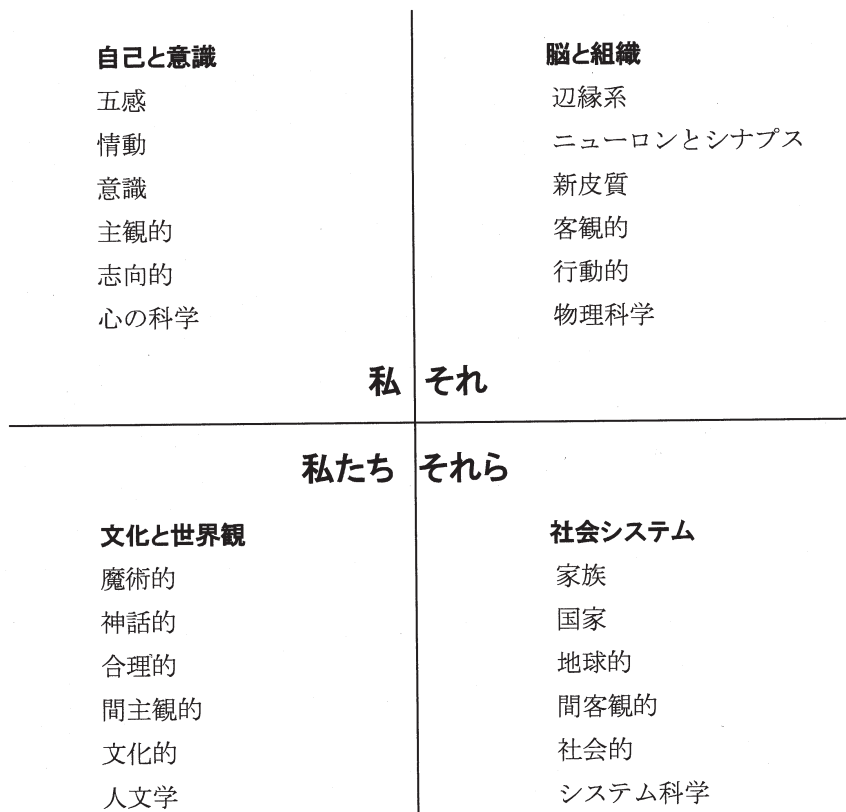


図2 「万物の理論」の四象限の構図

何にあるべきかを考える問題である」と考えて研究活動を行ってきた。環境研究会の最終報告書は2006年度中に印刷される予定である。環境研究会の目指すところは「新しい知」に基づく「次なる社会システム」構築のための学問的な基礎をつくり上げることである。したがって、それは、中国だけを意識したものではない。環境問題をこのように広くとらえた理由は、環境問題の発生を、自然（客体、身体）と人間（主体、精神）を分離したデカルト的二元論を基礎にして発展してきた近代社会の必然的結果と理解したからである。しかし研究を進める過程で、この定義自体が二元論による二項対立的枠組みに捉われていることに気づいた。そこで、そのような枠組みから抜け出し、環境保全のための「新しい知」に関する実証的な資料を集めるために、私たちは「麗江古城の水と社会」を、ケン・ウィルバーの哲学の枠組みを借用して調査することにした。そこで最初に、第4

論文でも紹介したウィルバー哲学について、再度、簡単に解説しておきたい。

ウィルバー（2002）の『万物の理論』は、この本の帯に書いてあるように、「物質・生命・心を含む宇宙と人間のホラーキー構造を、あらゆる思想・哲学・宗教を含んで統合的に明らかにし、我々のいる位置と進むべき未来を鮮やかに指し示した」という点で、これまで私たちが COE-ICCS 環境研究会で探し求めてきた「新しい知」の1つのモデルを提供する。彼は、万物を取り込む統合的なビジョンの構築に当たって、「それ、それら、私、私たち」という4つの象限を提示する。図2は、ウィルバーの考えを基礎にして、私の考えも少し入れて整理した「万物の理論」の四象限の構図である。この図の右象限の2つは外面にあるものを、左象限の2つは内面にあるものを、また上の2つの象限は個（人）的なものを、下の2つの象限は集団的なものをそれぞれ示しており、万物

はこの四象限の中に織り込まれている。さらに各象限にはラセン・ダイナミックスの展開の波のような (cowan@spiraldynamics.com) 垂直方向へ登る「発達のレベル」の存在が認められる。彼はまた、時間も「発達のレベル」だと考えている。

図2のもとになったウィルバーのオリジナルな図には (ウィルバー, 2002, p. 89)、各象限の発達の段階が、中心から発する平面上の矢印の方向に、次のような順序で記入してある。

- ・「それ」(右上) 象限：組織段階→辺縁系→新皮質→その他。
- ・「それら」(右下) 象限：生存のための群れ→民族的な部族→封建的国家→連合国家→価値の共同体→統合的共有→ホリスティックな網目構造／狩猟的→鋤農業的→農業的→産業的→情報的。
- ・「私」(左上) 象限：本能的 (ベージュ)→呪術的 (パープル)→自我中心的 (レッド)→神話的な自己 (ブルー)→達成者的な自己 (オレンジ)→感受性ある自己 (グリーン)→統合的な自己 (イエロー)→ホリスティックな自己 (ターコイズ)。
- ・「私たち」(左下) 象限：古層的→アニミズム的-呪術的→力の神々→神話的秩序→科学的-合理的→多元的→統合的→ホロニック／前近代→近代→ポストモダン。

なお、「私」象限に記入された括弧内の色は、ドン・ベックとクリス・コーワンによる「ミームの色」である (cowan@spiraldynamics.com)。上に引用した各象限8段階の「発達の段階」を、より理解しやすいように、それぞれがスパイラル状態で発達する、増大する統合的な包括の波 (入れ子の中の入れ子という)「身体・心・魂・霊」の4つのレベルで示すこともできる。ただし現代科学では、身体と心まではその実在が認められているが、魂と霊の実在性についてはまだ研究者の意見が分かれている。「こうした多様な構成要素ないし流れについて、もっとも驚くべきことの1つは、

それらのほとんどは相対的に独立したかたちで発達することである」(同, p. 90)。そして、左上象限にある「個人の意識は、客観的な有機体や脳 (右上象限)、自然、社会システム、および環境 (右下象限)、そして文化状況、社会的価値、および世界観 (左下象限) と分かちがたく織り込まれている」(同, p. 97)。ただし私たちは、後述する理由により、「環境」と「自然」をウィルバーのように右下象限内に限定してしまうことには賛成できない。むしろそのように限定することによって「環境」の本質はゆがめられると考える。ただし各象限が「相対的に独立したかたちで発達」していることについては、21世紀初頭の地球が科学技術の突出した発達によって、右象限だけが異常に肥大したいびつな世界になっていることから、認めざるを得ない。私たちは、そのいびつな発達の具体的な現れが環境問題であると理解する。

ウィルバーは、更に、これまでに発表されたさまざまな学術的な理論が、「しばしば1つの象限に焦点を当て、しばしばその他の象限を排除してきた」と述べている。すなわち、物理学・生物学・神経学などのハード・サイエンスは右上象限を、社会学・経済学などのシステム科学は右下象限を、現象学・内省的心理学・意識の瞑想的状態などは左上象限を、そして価値・概念・世界観・文化などの理論家は左下象限をもっぱら対象にしてきた。これらの既存の学問領域とは異なり、彼が推奨する統合的アプローチは「全象限・全レベル」を対象にしており、「すべての象限における還元できないリアリティを包括するためのもの」(同, p. 101)である。具体的には、身体レベルで生じた自然と人間の対立も、心のレベルにまで上げて考えれば統合の可能性が生まれるし、霊のレベルまで上げればすべての対立は消滅する。私たちはこれまで環境研究会で、環境問題の複雑さについて検討を行ってきたが、まさしく環境問題こそ「全象限・全レベル」にまたがる統合的アプローチを必要とする問題であった。その意味で私たちは「環

表1 方法論と調査の枠組み

象限	ウィルバーの枠組み		麗江のリアリティ		水
右上	それ 外面 個	客観性 ハード・サイエンス 有機体、脳	山川草木 地震 五彩花石	泉	水循環 水量 水質
右下	それら 外面 集団	間客観性 システム科学 社会システム	社会、経済 茶馬古道、王府 エコツーリズム	町内清掃 祭り	水利用 三眼井 水管理
左上	私 内面 個	主観性 意識、心 道徳、宗教 価値観	ナシ族の宗教 殉情物語 天国、地獄 愛の樂園	開かれた心 親切、もてなし 美意識	水神様 水信仰
左下	私たち 内面 集団	間主観性 社会的価値 文化、芸術 世界観	神話、白沙壁画 トンパ舞、ナシ古楽 手芸、工芸 トンパ文字	建築、街並み	水文化

表2 時間を「発達のレベル」として見た麗江における四象限の調和

時間軸	四象限の調和	問題点
過去	調和していたか？	「自然」と「人間」を包み込むより大きいパイは、何だったのか？
現在	調和しているか？	1996年の雲南大地震の前の状況は？ 近代化や観光地化に伴う影響は？
未来	調和を保つには？	物質的な技術の発達に払うと同じほどの注意を、意識の発達にも払わなければならない？

境」を右下象限内に閉じ込めることには賛成できないのである。また、ギリシャの古代都市ミレトスの人タレスが「万物の原理は水である」と言ったように、環境問題を考える際には、「自然」の一部である「水」も、水循環・水社会・水信仰・水文化という言葉からも理解できるように、「環境」と同様に全象限に織り込まれていることに留意する必要がある。本稿が、水をつなぎ手として統合を試みようとしているのは、私が水循環の専門家だからという理由によるのではなく、水の全象限的特性を意識したからである。

麗江古城の環境論を論じるに当たって、ウィルバー哲学の内容をより具体的に示したものが表1であり、時間を「発達のレベル」として見た麗江古城の四象限の過去・現在・未来における調和が

表2である。以下この枠組みにしたがって麗江古城の「環境」を、四象限空間上で時計回りに、水循環（右上象限）、社会システム（右下象限）、文化（左下象限）、心（左上象限）の順に見ていくことにしたい。

5. 麗江の水循環

降水として地上に到達した水は、地域の循環場（容れもの）である地形・地質の中を循環する。図1は旧ソ連製の10万分の1地形図をもとに作成した調査対象地域の概略図である。麗江盆地は東西両縁をほぼ南北に走る断層の活動によって形成された南北23km、東西4~5kmの細長い地溝性小盆地である。盆地底は西に傾いており、その南



写真7 拉市海の連続写真



写真8 拉市海の岸辺での環境保全のためのポプラの植樹

北傾斜は北ほど急で、清溪水庫の数 km 北方が傾斜の変換点に当たり、この付近から南では傾斜が緩やかになる。この盆地の地下水流動系は、大きく見て盆地の北半分が涵養域、南半分が流出域に区分される。行政的な「麗江古城区」は獅子山と金虹山の間に位置し、地形の全体配置とその乱れから、この付近を東—西および北北西—南南東方向に走る断層の存在が想定される。想定されるその東—西断層の西方延長上に位置する拉市海（重要湿地としてラムサール条約に登録済み）は閉塞湖であり（写真7）、湖の西南縁の南約500mのところに直径2mほどの穴があって、そこから湖水が地下水流出している。なお、私たちは調査のかたわら拉市海的环境保全に貢献するべく、2005年秋に環境研究会で雲南省のバイオガスについて講演していただいた陳永松氏の斡旋で、湖岸で地元の人々と一緒にポプラの植樹を行ってきたが（写真8）、いつの日かこのポプラの生長した姿を

見たいものである。

この付近一帯の地質は石灰岩であり、断層活動による亀裂系も多数存在するはずである。湖水が漏出する穴の存在は、06年7月26日に行った追跡調査で、私たちも確認した。図1と後述する図4に記入した丸数字は現場で水質を測定した地点番号を示し、図5に記入した数字は、図1と図4の丸数字に対応する。そしてこれらの数字は、水温と電気伝導度の測定値の一部を整理して示した表3の丸数字の地点番号と対応する。比較のために、05年8月の雲南省調査時の3地点（中国科学院地理科学与資源研究所による測定値）と、06年1月に私たちが行った南京調査時の2地点の測定値も記入してある。電気伝導度（EC）は水中に解けているイオンの総量を示す値であり、この数字が大きいほど天然溶存成分や汚染物が多く含まれていると考えることができ、水循環とくに地下水循環を追跡する際の有効な指標となる。

「民国製雲南省十万分一図二百一号」地形図上では（図3）、黒龍潭の北約5km付近に地下水の流出域であることを示す湿地が存在する。ただし、この地図の作成技術と精度は極めて低く、旧ソ連製の地図と比較すると、地形は全く違った形に描かれているので、「5km」という数字の絶対値を信頼することはできない。ここでは、黒龍潭の北にかつて地下水の流出域であることを示す「湿地帯が存在していた」ことを示すだけの資料として提示している。この湿地から流れ出す水は、現在のように黒龍潭へ向かってではなく、もっと南ま

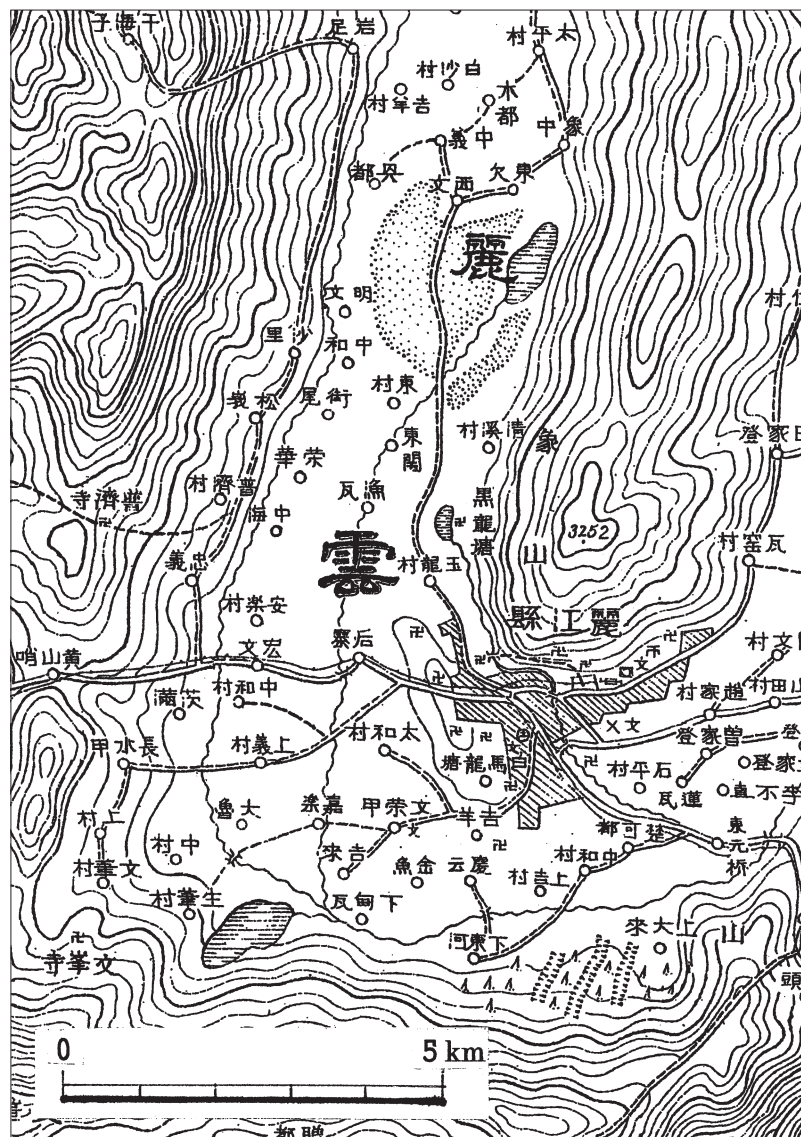


図3 民国製雲南省十万分一図「麗江県」の一部

で流下して玉水寨から流出してくる川へ合流している。現在の清溪水庫は、この湿地性の土地を人工改変して造った貯水池だと考えられる。象山から流出する地下水はこの清溪水庫に一時的に貯留され、そこから黒龍潭へ送られている。現在、麗江古城への安定した水供給はこのような仕組みで行われている。黒龍潭の東側の湖底一帯にも象山からの地下水が湧き出しているので（写真5）、現在の麗江古城の水源はすべて象山からの湧水に依存していることになる。麗江の年降水量は953.9mmで、その81%は6～9月の期間に集中

して降る（李，2001）。また麗江古城は、チベット高原の南につづく標高2400mの高地に位置するため、水蒸気圧が低く、蒸発強度は強い。私たちは地元の人からたえず水を飲むように忠告されたが、確かに鼻孔や唇が異常に乾くし、室内に干した洗濯物もすぐ乾く。このような比較的乾燥した土地にありながら、麗江古城区は、複数の断層が交差する、地下水の流出しやすい極めて水に恵まれた場所に立地しているのである。

図4は麗江古城周辺地域の詳細図であるが、市販されている地図帳の市街図から作成したもの

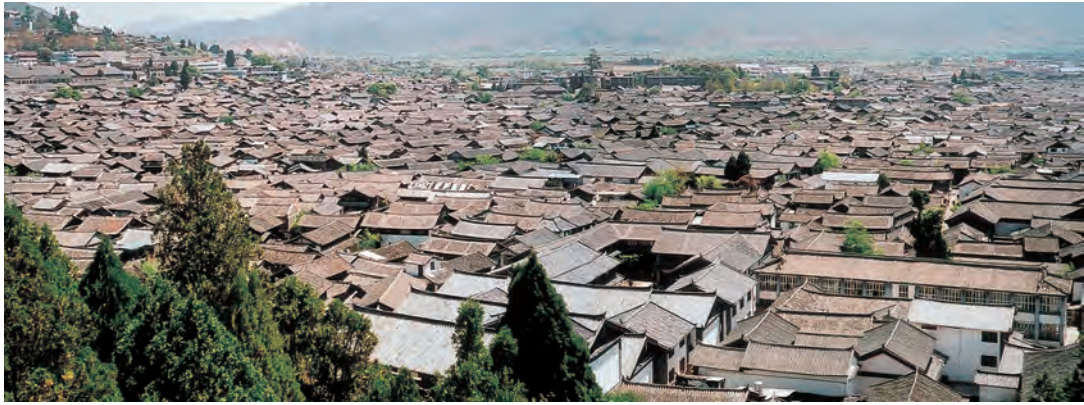


写真9 獅子山から眺めた密集した麗江古城の瓦屋根

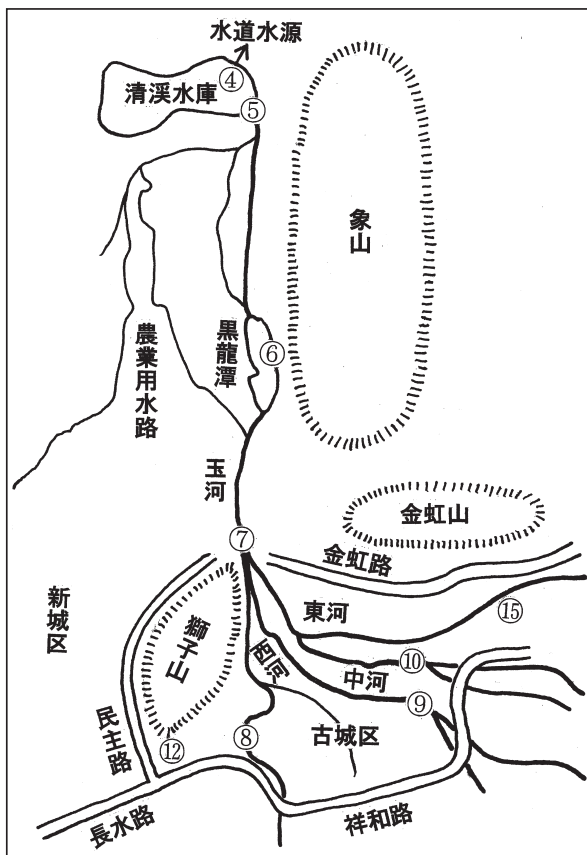


図4 麗江古城周辺地域の地形と水文状況（榎根原図）

で、縮尺・方位とも正確ではない。外郭道路である民主路、長水路、祥和路、金虹路に囲まれた部分が麗江古城区で、麗江古城には中国の都市としては珍しく城壁がない。古城区には1階建てか2階建ての木造瓦屋根の民家が密集しており（写真9）、近代的なホテルや商業ビルは新城区に建てるよう規制されている。黒龍潭から流れ出る玉河



写真10 玉河広場の二連水車と分水堰
（向って右より順に西河、中河、東河）

は、古城の北の入り口にある玉河広場に設けられた堰（図4の⑦の下流）で西河、中河、東河の3つに分けられる（写真10）。自然河川である玉河の延長が中河である。中河が地形面を少し浸食して浅い谷を刻み込んでいるという事実から、古城区付近は緩やかな隆起傾向にあると解釈される。

図5は、観光客用に市販されている「麗江古城示意図」（この図も縮尺・方位とも正確ではない）を基図に用いて、その中に、現地調査によって私たちが確認することのできた水路・湧水・井戸の位置を記入したものである。私たちは図5の範囲内で湧水を6ヶ所確認したが、獅子山中腹の湧水⑬を除いた5ヶ所はいずれも後述する「三眼井」として利用されている。開放井戸は2ヶ所確認できた。地下水面は南へ行くほど浅くなり、手押しポンプで地下水を利用している民家もある。中河沿いの2つの三眼井と2つの開放井戸はいずれも

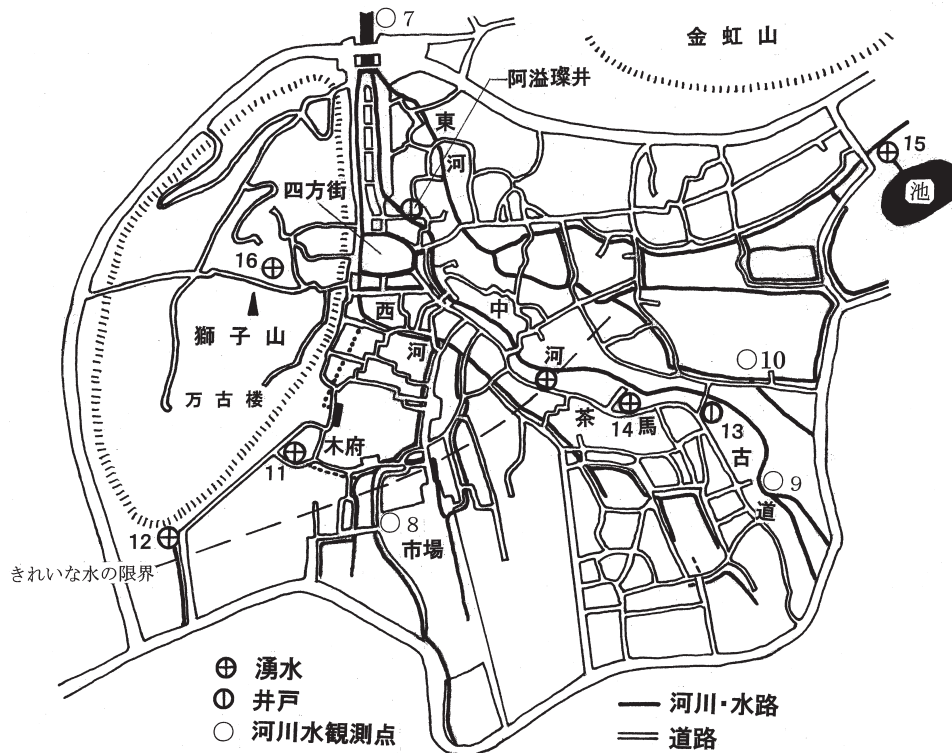


図5 麗江古城の水路（川）と湧水の分布（榎根原図）

公共用で、このうちの茶馬古道に沿った3つは茶馬古道の北東側に形成された段丘崖の下の湧水（地下水）を利用している。表3で明らかなように、獅子山系と金虹山系の湧水（⑪⑫⑬⑭⑮⑯）のEC値は、象山系のEC値が $300\mu\text{S}/\text{cm}$ 前後であるのに対して、 $479\sim 626\mu\text{S}/\text{cm}$ と大きい。これは麗江古城の水源である象山と、獅子山および金虹山の地質の違いに由来するものである。その原因として考えられるのが、想定した複数の断層の活動による基盤岩石の破碎である。獅子山系の3つの湧水で、ECの値が⑯<⑫<⑪の順に大きくなっているのは、図6の模式図Aに示したように、涵養から流出に至るまでの地下水流動経路の長さの違いによるものと解釈される。地下水の水質は、帯水層を構成する物質と地下水との接触時間の長さの関数として進化するが、その接触時間は流動距離の関数だからである（末尾の追記参照）。

麗江古城区を縦横に流れている水路の水は、生活に密着した、人体の血脈に例えることができる

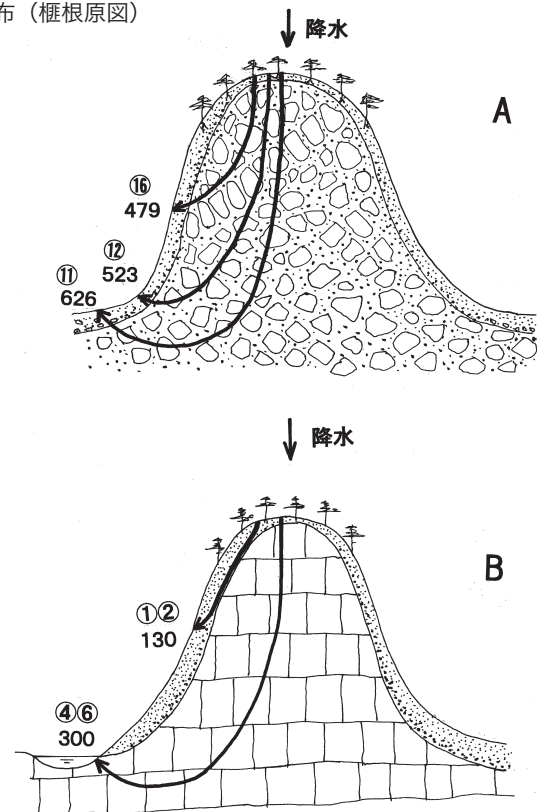


図6 地下水の流動経路による水質（EC値、 $\mu\text{S}/\text{cm}$ ）の進化を示す模式図

- A 破碎されている石灰岩の山地
- B 破碎されていない石灰岩の山地

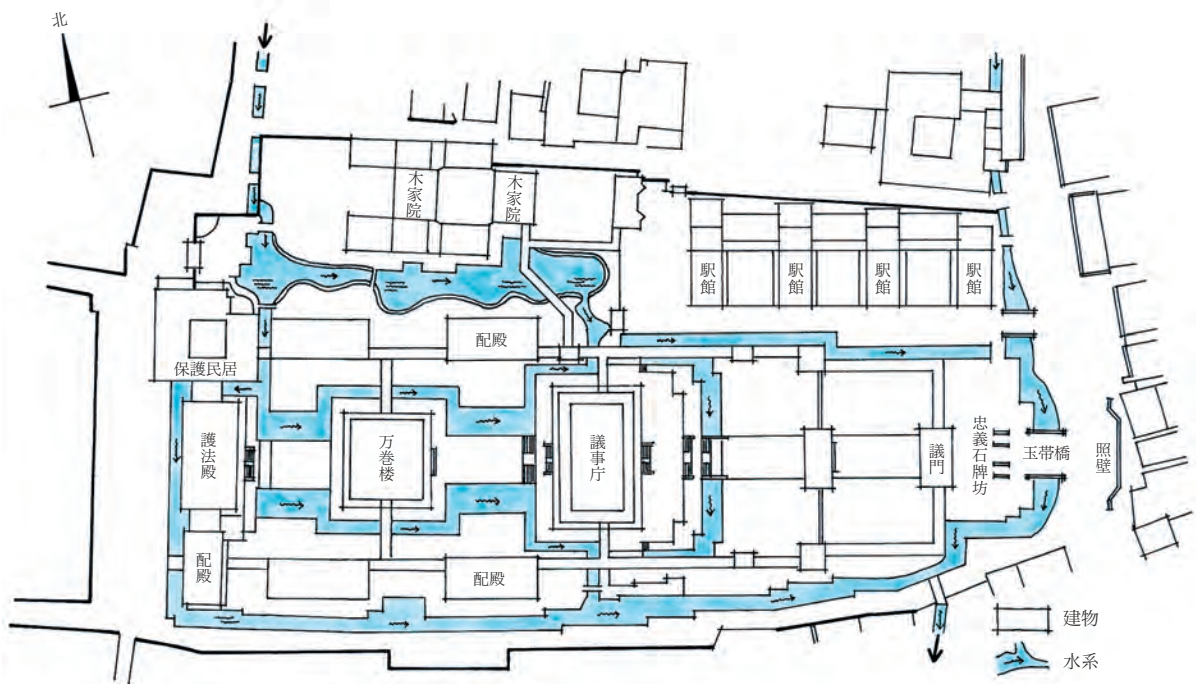


図7 木府へ「気」を運ぶ水の流れ (樊炎冰, 2005を参考に榎根作成)

ほど重要な水であり、麗江古城に独特の水文化を生んだが、実をいうと、元朝年間に開削された西河の本来の役割は、納西族に地方自治権が認められて、この地に行政府（木府）が設けられたとき、風水思想に基づいて木府へ「気」を引き込むために造られた導水路であった。東河は清代の「改土帰流」（少数民族の持つ地元の風土風習を改め、支流の文化を漢民族の本流の文化に帰化させる政策で、18世紀前半に少数民族に強制された）後に、中央から派遣されて来た官僚の住居地へ水を流すために造られ、後に農業用水として利用されるようになった。納西族は争いを好まない民族で、元の侵攻時には真っ先に降伏し、元朝、明朝、清朝にわたって中央政府の庇護を受けることに成功した。納西族は絵文字である「東巴（トンパ）文字」を持っていることで知られるが、姓は持っていなかった。納西族の首長は、明の皇帝朱元璋から「朱」の字の一部をもらって「木」を姓とした。木氏は元、明、清三朝22代470年にわたってこの地を治めた。麗江に城壁がないのは、木を城壁で囲むと困となるので、困りごとの発生を避けるためだっ

たと伝えられている。これは話としては良くできているが、城壁を造らなかったより重要な理由は、後述するように、納西族の「心」が他の民族に対して「開かれて」いたからではなかったかと推察される。なお、納西族の庶民は「和」を姓にする者が多いが、漢字の「和」は、木が笠をかぶって荷を背負った姿を表すからといわれている。

麗江古城区の南と北では約10mの高低差があるので、水路の水の流速は比較的速い。しかし西河について見ると、その本来の目的は木府へ水を送ることであり、木府へ引き込まれた水は、図7のように、木家院の南にある池に貯えられてから、二手に分かれて護法殿、万卷楼、議事庁の周りを一周し、木府へ「気」を引き込んだ後に、木府の外へ放流される。このように二重の水路に囲まれたかつての木府の姿は、水上に浮かぶ船に例えることができよう。ただし、木府が観光客に開放されるようになった現在では、図7に記入してある水路の半分近くはすでに埋められてしまった。「気」や「風水」は、古典的科学によってはその実体が確認されていない概念であるが、中国科学

表3 麗江古城の水質（宮沢哲男作成）

地点番号	名称	高度 m	水温 ℃	EC μS/cm	pH	流量 l/sec	備考
①	玉峰寺姉池	2690	10.6	134		10.30	玉峰寺、チベット仏教、姉妹池の姉の出口
②	玉水寨	2710	9.7	133	8.84		姉の湧き水地点、妹の方は水が取れず。昼食
③	束河古鎮	2460	15.2	301	8.11		束河古鎮の最上流西の湧水池
④	清溪水庫	2430	15.5	305	8.01		清溪ダム北部の湧水付近
⑤	黒龍潭	2440	14.2	290	8.21	1918.00	黒龍潭流出口下
⑥	珍珠泉	2440	15.2	291	7.90		黒龍潭に湧き出す泉、線香で祭られてあった
⑦	玉河広場	2390	14.2	291	8.14		水車上手からの出発点、 $Q \approx 1\text{m}^3/\text{S}$ （目算）
⑧	西河市場	2390	14.6	265	8.14		西河、市場手前の水路
⑨	中河	2390	14.1	298	7.92		中河： $Q \approx 250 \sim 350/\text{S}$ （目算）、2つに分流する直前
⑩	東河	2400	14.2	293	7.97		東河、第一高級中学校前、 $Q \approx 20 \sim 30/\text{S}$
⑪	三眼井	2440	14.5	626	7.40		光碧巷三眼井、獅子山からの湧水
⑫	白馬龍潭	2420	15.5	523	7.65	22.60	白馬龍潭（三眼井）、獅子山南麓からの湧水
⑬	月季井	2430	15.2	378	7.60		茶馬街道北側の段丘崖下の開放井
⑭	石榴井	2445	14.4	307	7.75		三眼井（石榴井）
⑮	甘澤泉	2400	15.9	662	7.75	10.27	桑さん宅南の三眼井、 $Q \approx 30/\text{S}$
⑯	獅乳泉		15.7	479	8.50		獅子山中腹の湧水
参考1	属都湖	3614	15.1	35	7.70		シャングリラ近郊の高原氷河湖
参考2	金沙江	1419	18.8	445	8.27		麗寧十八湾を降りたところ、長江の上流
参考3	昆明の滇池	1891	24.2	469	9.63		中国で最も汚染の著しい湖の一つ
参考4	南京の長江		19.0	314	8.14		棧橋脇、温排水の影響の可能性あり
参考5	蘇州の留園		7.3	977			庭園の池の水

注) 流量データは、『麗江納西族自治県志』による。

高度は参考程度、精度は低い。

院の指導する『中国国家地理』が2006年初めに風水特集号を出したことから分かるように、最近では科学的関心も高まってきている（中国国家地理、2006）。現在でも、西河の主目的は木府と市場への水供給にあるので、今回の調査時にも、図5で西河から東南方向へ分流した水路の水には古城区の端まで達するだけの流量はなかった。この東南方向へ分けられた水路の水が一度消滅し、破線の前で再び流れだすのは、破線の地区で観光用の商店や旅館の新築工事が行われており、その工事現場から水路へ排水された地下水が水路の中を流れていたためである。図5の15（表3の⑮）の湧水の先にある池の存在と併せて考えると、麗江古城区の下流側境界付近では、地下水面は地表面のすぐ下にあると考えることができる。以上の考察から麗江古城区は、扇端部に湧水帯のある扇状地に類似した水文地形特性を有していることが

分かる。

目視で判定した「きれいな（透明な）水の限界」が図5に弧状の破線で示してある。ただし、日中の人間活動による水汚染への影響を調べる目的で、同じ日の朝方と夕方に、古城区出口付近の同一地点で測定を行ってみたところ、ECの値は西河では朝 $265\mu\text{S}/\text{cm}$ ・夕 $279\mu\text{S}/\text{cm}$ 、中河では朝 $298\mu\text{S}/\text{cm}$ ・夕 $286\mu\text{S}/\text{cm}$ であり、その時間変化は誤差の範囲内に収まるものだった。麗江古城区では下水は分流式を採用している。住民が水路の汚染防止に努力していることも加わって、日中の人間活動による水路への水汚染物質の負荷は軽微なものであった。

水循環に伴う水質進化を、表3の「参考1～5」も含めて簡単に考察してみたい。私たちがこれまでに、中国科学院地理科学与資源研究所と共同で測定した中国でのECの最小値は、雲南省の香格



写真11 香格里拉郊外の属都湖

里拉郊外の属都湖（参考1）における $35\mu\text{S}/\text{cm}$ であった（写真11）。高地に降る降水で涵養されたばかりの、まだ進化の初期段階にある湧水のECは、世界中どこでもこのように $50\mu\text{S}/\text{cm}$ 以下の低い値を示す。①や②の $EC130\mu\text{S}/\text{cm}$ 程度の湧水は、石灰岩地帯ではあっても、図6のBに模式的に示したように、これらの地下水の年齢が若く、表層風化帯中を速く流れる山地急斜面の地下水に由来するからと考えられるが、岩盤中の割れ目を流れる場合でも流動距離が短ければ同様の水質に進化するであろう。しかし基盤岩中の割れ目をゆっくり流れて山麓で湧出する地下水のECは $300\mu\text{S}/\text{cm}$ 前後となる。EC $300\mu\text{S}/\text{cm}$ という値は、日本でならば尿尿汚染が疑われるほど高い値であり、飲用不適の水となるが、麗江盆地では汚染が原因ではなく、石灰岩地帯における地下水特有のカルシウム・イオンなどの含有量が多いためと解釈される。前述したような理由で、獅子山系と金虹山系の湧水のEC値は $600\mu\text{S}/\text{cm}$ 前後と高い。参考2は、麗江から瀘沽湖へ行く途中にある麗寧十八湾を一気に高度約500m下った地点で測定した金沙江本流の値である。私たちはこの近くで、レストランのトイレの洗浄水が金沙江へ未処理のまま直接放流されているのを目撃しているから、EC $445\mu\text{S}/\text{cm}$ という高い値の一部は人工的な汚染によるものであろう（参考1～3の詳細は、梶根ほか、2006による「雲南省調査報告」参照）。長江の河

川水のEC値は南京まで流下すると降水による希釈効果や自浄作用で $314\mu\text{S}/\text{cm}$ と低くなる。しかし汚染の著しい「三湖」の1つである太湖の下流に位置する蘇州の留園の池水は $977\mu\text{S}/\text{cm}$ と高かった。

結論として、麗江古城は水循環や景観の観点から、理想に近い場所に立地していると言える。麗江古城は、象山からの湧水を起源とする安定した清澄な水源を有し、その水を流すのに必要な適度の重力資源（傾斜）にも恵まれている。想定される断層活動で形成された獅子山と金虹山は、この地に景観美を付与するとともに、古城内の湧水の涵養源としても機能している。黒龍潭から流れ出す玉河沿いの水と緑は、茶馬古道を往来する旅人に心地よい水辺環境を提供してくれた。このような極めて水条件に恵まれた土地であったからこそ、納西族の人々は水の流れを巧みに活かした独自の水社会システムを構築することができたのである。

6. 麗江の社会システム

麗江の繁栄は木府の経済力によるところが大きい。そのような富の蓄積を可能にしたのは、この地が茶馬古道と西南シルクロードの交通の要衝を占めていたからである。しかし本稿では、まだ十分な資料が得られていない経済の問題には立ち入らず、フィールドワークで情報を得ることのできた水に焦点を合わせて、麗江の社会システムを見ていくことにしたい。

三眼井：三眼井は三疊泉とも呼ばれる。これが古城観光の目玉の1つであることは、ポンプで水を供給する「観光用三眼井」が古城東南部の新しい広場に最近つくられたことから分かる。住民が現在も生活用に利用している、図5に示した5つの三眼井（⑩を除く5つの湧水）のうちで、最も典型的といわれる「一井三潭」が⑪の光碧巷三眼井（写真12A, B）である。半月形の石囲いの



写真12A 地点番号⑪光碧巷三眼井を上泉側から写す



写真12B 光碧巷三眼井を下泉側から写す

ある、地下水が湧き出している上泉の水は飲料用で、中泉では食品を洗い、下泉では衣服や臍物を洗う。水は上泉→中泉→下泉へとかけ流され、汚れた水は下泉から排水路へ溢れ出す。三眼井の脇には目立つように大きな赤い字で「用水公約」を彫った石版が立ててあり（写真13）、光義街居民委員会、光碧巷の名で「用途別の泉水利用は伝統です。洗った後はゴミを残さず各自で清掃して片付け、ごみや汚物を泉のそばに放置しないようにしましょう。人が健康に暮らせるように水源を清潔に保ちましょう」と訴えている。早朝にここへ行くと大きなポリエステルのタンクをもって水を汲みに来る人に何人も出会う。⑫の白馬龍潭の規模は⑪の2倍以上もあり、いつも人々で賑わっている（写真14A, B, C, D, E）。

東河古鎮にある三眼井の傍らに立つ看板には次のように書かれている。「水は万物をよく利するが争わず」。水はまた汚れやすき貴重なる資源。遊牧時代には、納西族は水を生命の源泉とみなし“水草を探し求めながら暮らした”。農耕定住の時代には、彼らは村に水を引き入れ、一つの水を三つに分けた。水の傍で便利な生活を十分に楽しんだ。都市の時代になって、“三眼井”文化を創造した。湧き出す水を三つの池にかけ流し、一番目を飲用水、二番目を洗菜水、三番目は洗濯水にと、一筋の水を三つに用いた。争わず逆らわず、これが自然を敬慕する納西族の証であり、環境を心か



写真13 光碧巷三眼井の脇に立つ「用水公約」を彫った石版

ら愛するよき伝統である」と。東河の看板のこの文章からも、麗江古城が納西族の伝統を受け継いでいることがよく分かるが、かつて村に引き入れられた水は、現在の三眼井のように用途別に3つに分けられたのだろうか。この短い文章からも、インド・アリア人の場合と同様に、遊牧民だった納西族が、流れる水と初めて出合ったときの喜びが伝わってくる。

放水冲街：写真15は、東河古鎮の中心にある地元特産品街で毎日行われている観光行事「放水冲街」の看板である。ここでは14時になると、上手の水路を堰き止めて、水を水路から溢れさせ、水流の勢いで広場のゴミを洗い流す様子を、観光客に見せている。5つの街道が集まってくる麗江古城の四方街では、毎日取引が行われ、いつも人々で賑わっていた。多くの人が集まって活動すれば



写真14A 地点番号⑫白馬龍潭の全景



写真14B 白馬龍潭の上泉、飲料用



写真14C 白馬龍潭の中泉、野菜洗い用



写真14D 白馬龍潭の下泉、洗濯用



写真14E 白馬龍潭で野菜の屑を掃除する人



写真15 束河古鎮中心に立つ観光客向けの「放水冲街」の看板

当然ゴミがでるので、ここでも毎日「放水冲街」が行われていた。麗江古城では、人工の西河は獅子山寄りの高所を流るように設計されているが、これは束河での経験を活かした結果であろうか。四方街では西河を堰き止めて、水を広場へ溢れさせ、広場の清掃を行った。広場に溢れた水を受けのために、広場の四方には中河へ流れ込む排水路

が設けてある。当時のゴミはほとんどが有機物であったから、流れてくるゴミを中河の下流側で掬い上げて、畑の肥料にした。まさしく流れる水は有力なネグントロピー源である。また「循環経済」の萌芽をここに見ることができる。麗江古城では、風水思想を導入することによって、水の機能を地域社会の中で最大限に発揮させることができたの



写真16 水路とそこへ降りる石段(1)



写真17 水路とそこへ降りる石段(2)



写真18 五彩花石を敷き詰めた道路



写真19 古城の末流に近い細い水路の濁った水で食品を洗う人

である。

水路：納西族の人々は水に特別な感情を抱いており、「自分の眼を護るがごとくに水を護る」といわれる。したがって水源は最も美しい眼となる。彼らは水源に対して畏敬と崇拜の念を抱いている。麗江古城では住宅から水路までの距離が最大でも50mを超えない。水路に沿って造られた麗江古城の街並みは「家々門前繞水流 戸々屋後垂楊柳」と詠われてきた。水路にものを投げ捨てることは、神を怒らせる恥ずかしい行為として厳しく禁じられていた。街中を流れる水路の水は各家庭で日常使われる大切な水であった（写真16, 写真17）。街中では、下流の人々のことを思って水を汚さないように、朝は水路で洗濯を行わなかった（林維東編, 2003）。日中でも洗濯水は水路へ流さず、天然の五彩花石を敷き詰めた石畳（写真18）の道路の上に撒いた。この伝統は今でも

ある程度は生きている。私たちは早朝に水路のゴミ拾いをしている人々にしばしば出会った。尋ねてみると、答えは「ボランティア」のことも、「仕事」のこともあった。写真19は、古城の末流に近い細い水路の濁った水で食品を洗っている人である。水は最後まで大切に使われている。

橋：麗江古城は、ロシアのサンクトペテルブルクに似た橋のまちでもある。ただし京都の場合と同様に、まちの規模は2桁近く小さい。石橋、木橋、丸太橋、板橋、めがね橋、アーチ橋など様々な橋を見ることができる。一般に中河にかかる橋は大きく、石橋が多いが、西河と東河では小さな板橋も多数見かける。名所の1つである中河にかかるめがね橋（大石橋）の写真20よりも、水路にかかる板橋の傍らに咲く淡いピンク色の雲南椿を写した写真21のほうに、旅人は古城らしい風情を感じるかもしれない。橋は350もあるといわ



写真20 中河にかかる古城最古といわれる石橋
(長さ10.6m、幅3.84m)



写真22 水路に沿って並ぶ赤い提灯の灯が光る飲食店



写真21 板橋と淡いピンク色の雲南椿

れ、水路の縦横に走る古城区の人々を結ぶ通路として欠かせない。水と橋は納西族の魂ともいわれる。昔は橋のたもとに市が立ち、それを橋市と呼んだ。橋ごとに違った品物が売り買いされた。その証は鴨の卵が売られた「鴨蛋橋」、鶏と豆が売られた「鶏豆橋」など、橋の名前として残っている。また四方街の大きな石橋では鷺と薬草が売られていたという。橋、水路、古い家、玉龍雪山、そして納西族は、併せて「古城最美的画面」と語られている。

夜景：麗江観光の最大の目玉は夜の食事とショッピングであろう。古城には現在1600余りの店舗があるというが、水路の両側にびっしりと

並ぶ飲食店や土産物屋の軒には赤提灯がぶら下がっており（写真22）、その灯が水路の水面に映えてゆれる。このようなのどかな夜景を見ながら、旅人は酒を酌み交わし、胃袋を満たし、お土産の品定めをする。土産物に手の込んだ美しい手工芸品が多いのは、かつて商業と手工業のまちとして栄えた名残である。飲食店の前では民族衣装を着た若い娘さんたちが客を招いている（写真23）。彼女らは必ずしも納西族とは限らず、白族や摩梭（モソ）人も少なくないが（写真24）、民族の如何を問わず、彼女らは納西族の「開かれた心」を共有しているように見える。彼女らは、旅人に微笑みかけ、歌を歌い、興が乗れば客と一緒に踊ったりもする。麗江は冷房も暖房も必要ないといわれるほど温暖な地で、商店のはめ込み式の表戸は、店が閉まるまで外されたままである。都会でストレスの多い生活を送っている人々には、深夜まで続くこの開放的な雰囲気やすらぎの場として貴重であり、夜の四方街（写真25）では、納西古楽が奏でられ（写真26）、老若男女が合唱を楽しみ、観光客も混じえた踊りの輪が広がっていく広場へと変わる。端から端まで歩いて2kmほどの身の丈に合ったこの空間へは、自動車の侵入は禁止されている。古城内は排気ガスとも自動車事故とも無縁で、人々はゆっくりと散策を楽しむことができる。

湧水の問題：古城の水源は地下水に由来するた



写真23 店の前で客を誘う伝統衣装を着た
納西族の娘さんたち



写真24 日暮れを待つ伝統衣装を着た
摩梭人の娘さんたち

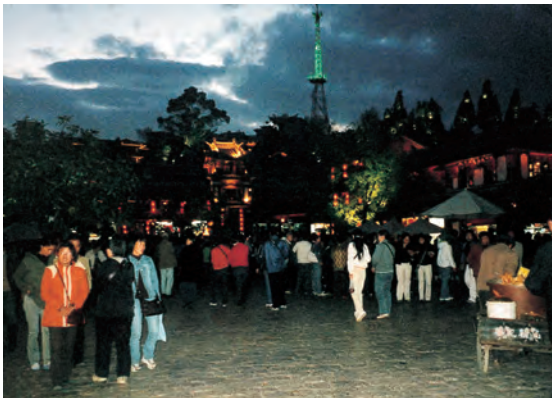


写真25 日暮れ時の四方街



写真26 四方街で納西古楽を演じる人々

め安定しているが、聞き取りによると、1983年は大旱魃で黒龍潭の湖底が露出し、麗江古城の水路には水が流れなくなり、まちじゅうが臭くなった。1995年以後にも1回ひどい渇水があり、この時にもまちは臭くなった。1996年の大地震の時は、水道が不通になり、井戸に頼っていた人々には伝染病の予防薬が配布された。現状では、10年に1回程度発生する渇水時の非常用水は井戸に頼るしかない。渇水の発生頻度が地球温暖化で増加することがないか心配である。

水管理：古城の老人たちの話によれば、麗江古城の水路の管理は、住民主体、生活主体で行われており、権力を握った政府が上から行うものではなかった。しかし、雲南大地震後に麗江では新たな地域計画が立てられ、このときに街並みと共に下水道や水路などが整備された。それ以前は「現在ほど水路の水は綺麗ではなかった」と、私たち

は地元の人から聞いているから、この計画を実行した政府の役割を高く評価したい。ボトムアップのアプローチもトップダウンのアプローチも、麗江古城の発展のためには必要であった。大理古城も地震の被害を受け、新たな古城の建設が行われたが、大理古城内に造られた水路をはさむ水景街（紅龍井）（写真27）からは、麗江古城の水路網が生活と密着したかつての面影を保持しているのに対して、いかにも人工的で観光用に造られたという印象を受ける。少数民族の伝統的な思想が、大地震のような危機に直面した時に、現実の景観となってその姿を現したからであろう。大理から麗江への道路の開通後は、「それまで大理で泊まっていた観光客が麗江まで行って泊まるようになった」と、05年夏に大理白族の観光ガイドが私たちに説明してくれた。麗江古城のエコツーリズムの最も貴重な資源は、驚くべきことに「納西族の



写真27 大理古城の「水景街」

心の中」にあったのである。

地域社会の水管理：納西族の村には「水管員」という特別な公務員のポストが設けてある。水管員は村民による選挙で選ばれ、主な仕事は、村民を導いて不定期に行う水路の清掃である。水路の清掃前に、まず水源を遮断して、水路の水を全部抜く。水の停滞しやすいところには泥がたまっているのを、それを取り除く。水路と道を完全に綺麗にしたら、再び水を引き入れる。このように村民と村民組織を含めた、水や川を保全する地域の仕組みが、日常生活の中に存在していた。麗江古城の納西族もこの仕組みを取り入れて、古城の水辺環境の保全に努めてきたのである（朱，2006）。

7. 麗江の文化

世界の歴史が示すように、高度な文化は経済力による何らかの庇護を必要とする。470年も続いた木府の経済力が納西族の文化、すなわち東巴文化の形成に果たした役割は大きい。東巴文化とは何かという問いに対しては、麗江古城が世界文化遺産に登録されているのであるから、この古城のすべてが東巴文化であると答えることもできるが、ここでは特に「神話」「東巴文字」「壁画など」の3つを取り上げ、麗江の文化について考えてみることにしたい。なお東巴とは祭司のことで、納西語では「知者」を意味し、世襲で、東巴文化の

継承者であり伝承者でもある（徐，2001）。

神話：納西族の聖地としてテーマパーク化され、観光客に開放されている玉水寨の神泉（写真28）の脇に「祭自然神場」がある。そこに立つ石碑には次のような物語が刻まれている。「伝説によると、人類と自然は異母兄弟であった。両親の死後、遺産をめぐる兄弟は争った。その結果、自然神が勝って遺産のすべてを得たが、人類は何ももらえなかった。何もなければ人類は生きられない。後に、天の神が東巴神（Dongbashenuo）を遣わして自然と人類の関係を調解（調停し和解する）した。しかし人類が自然を保護しなかったため、自然神は非常に怒って、“人類は木を切り、私の動物たちを殺しただけではなく、血まみれの獲物を川で洗った。彼らは私を全く尊敬していない。だから自然は、人類と平和でいることはできない”と言った。そこでトンパ神は大鵬という神鳥を送って人類と自然の関係を力づくで調解した。その後ようやく、人類は農地と、草地と、家屋敷を再び手にした。この調解の後、自然神は人類に“神泉のそばで香とヤクの乳を供えて私を崇拜し、森や樹木、鳥や動物たちを保護することを決意し、川で血まみれの獲物を洗うことはしません”と誓うように要求した。後に人類は良い食物



写真28 玉水寨の神泉と古樹

を神泉へ持参して自然神を崇拜し、万物の幸せを祈った。早魃の時は、納西族の人々は神泉へきて自然神に雨乞いをするだろう」。

上の物語のほかに、私たちは現地で次のような物語も聞いた。「人類が自然を破壊したので、天の神は怒り、風水害を発生させて全人類を洪水で流してしまった。しかし現在の人類の始祖となる人だけは、大きな太鼓の中に家畜と共に入れてやったので、彼は水に浮かぶことができ助かった。鶏が鳴いて安全を告げたので彼は太鼓の外へでた。天の神は彼に妻として二人の天女を与えた。そのうちの一人が自然（水・木・金・火・土の五大）を生んだ。もう一人の天女が三兄弟を生んだが、三人とも口がきけなかった。どうしたらいいかと天の神に尋ねると、神は“地上へ降りてから、お前は祈ったことがないではないか。天の神に祈れ。”といわれた。祈りを捧げたら子供たちは口がきけるようになった。その三兄弟が納西族（の始祖である三朶神）と、蔵（チベット）族と、白族である。」

上の2つの物語についての詳細な検討は、より正確な資料入手後の課題として残しておくことにし、ここでは次の3点だけを、納西族の文化の背後にある重要な思想として指摘しておきたい。第一に自然と人間の関係を「調解」されるべきものと捉えていること。第二にこのように自然を敬うエコロジカルな思想があったからこそ、麗江古城が生まれたということ。第三に人類を生かすも殺すも水次第であり、自然の表象としての「泉」が神と崇められていること。

東巴文字：既に11世紀には使われていたという東巴文字は、絵のような象形文字で（写真29）、納西族に「斯究魯究 sjiulijiu」と呼ばれている。それは「木を見て木を描く、石を見て石を描く」ことを意味する。東巴象形文字には約1400の常用字があり、象形文字から生まれた表音文字を含めると全部で2000余りあるといわれる。東巴文字の例として、図8に、水に関係する



写真29 麗江古城で見かけた半ば崩れた東巴（トンパ）文字の看板

事象を表す、お土産用に売られている『東巴紙典』から選んでコピーした文字を示した。この図で最も興味深いことは、「水」という象形文字が「水が泉から湧き出して低まったところを傾斜にそって流れる様子」を象形していることである。これは明らかに、石灰岩地帯の山間地に住む民族が「水を見て水を描く」方式による記号化である。もしも納西族が、大陸の河口付近の低平地に住み着いた民族だったとしたら、水をこのようには記号化しなかった筈である。「水を止める（阻水）」や「水を注ぐ（沖水）」という文字は、「放水冲街」という行為が日常的に行われていたことと関係があるかもしれない。「北方」が山を象形しているのに対して「南方」が水の流れる方向によって表されていることと併せて、東巴文字からは自然環境と文化の密接な関係がうかがわれる。しかし図8の東巴文字には、水が蒸発熱を奪うと「涼しい」ことや、傾斜のゆるいところで水が停滞すると「濁り水」になることなど、地域を問わずに通用する、科学的に納得できる表現法の文字も含まれている。

一般の人々は今では東巴文字を読むことはできないが、東巴は読むことが出来るので、東巴文字は「生きている最後の象形文字」ともいわれる。納西族は樹皮や麗江地区特有の堯花（この花は虫除け成分を含む）などを加工して東巴紙をつくる技術を持っており、麗江古城では紙づくりの工房

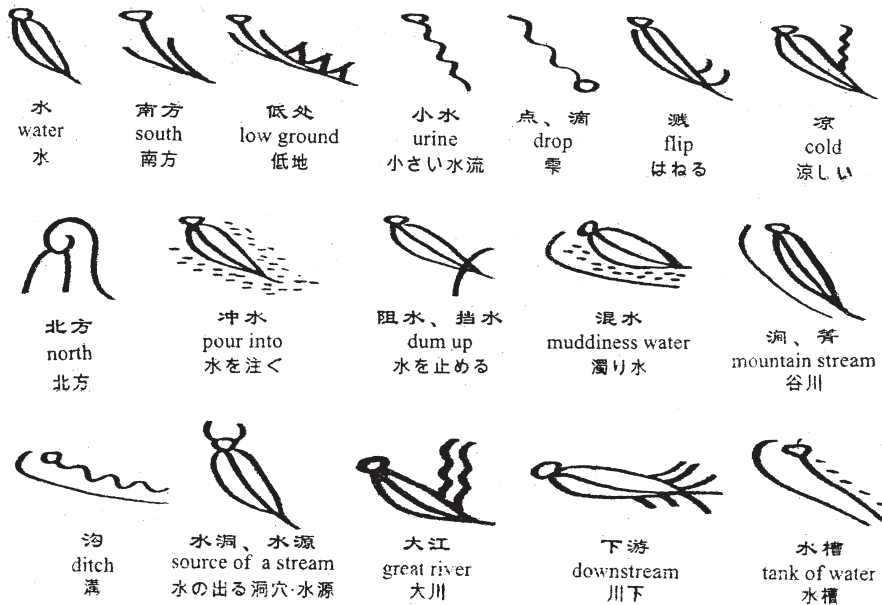
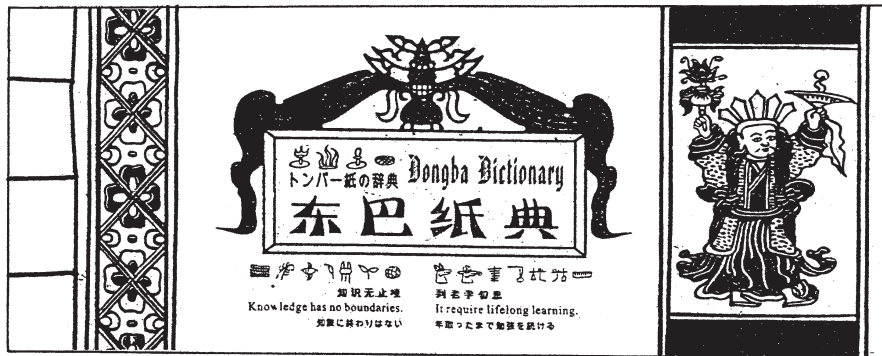


図8 水に関する事象を表す東巴文字

を見学することもできる。世界記憶遺産に登録された、東巴紙に描かれた『東巴経書』は、森羅万象に関する古代纳西族の百科辞典である。纳西族が発明した独自の文字は、纳西族の文化を今日まで維持・伝承する上で大きな役割を果たした。

壁画など：麗江が中国の辺境に位置していたことも幸いして、纳西族の宗教は、文化大革命の災いを大きく受けることもなく、それに関連する寺院・壁画・音楽・舞踊・占いに用いる木牌画 (wood-piece painting) ・魂が天国へ行くときに渡る橋となる神路図 (God-way picture) などの、多様な形態の文化遺産が今日まで生き残ることができた。それらは、現在では貴重な観光資源になっている。白沙村の大宝積宮やその他の寺院で見る

ことのできる大量の白沙壁画は、仏教、道教、東巴教などの美しいフレスコ画で、過去350年にわたって漢族、藏族、纳西族、白族などの画工が制作したものであるが、この期間は木氏が治めた時代と重なっている。また、玉峰寺 (図1の①) には樹齢500年以上と伝えられる「9薬18瓣」の、淡いピンク色の花が咲く大きな雲南「万花椿」があり (写真30A, B)、「護花使者」の老人が花守りをしている。450年近い歴史をもち、中国音楽の化石石といわれる「纳西古楽」も「東巴舞」と共に、宗教的な行為として継承されてきたものである。



写真30A 玉峰寺の「万花椿」
(樹高5.6m、胸径0.4m、冠幅50m²以上)



写真30B 「万花椿」の幹

8. 麗江の心

麗江の心とは、納西族の心である。納西族の始祖である三朶（サンダ）神は、白沙古鎮の北方、玉峰寺の東方に位置する北岳廟に祀られている。北岳廟は玉峰寺などの仏教寺院と比べると今はさびれており、私たちが訪れたときには再建のための寄付集めをしていたので、私たちも相応の寄進をしてきた。伝説によると、三朶は玉龍雪山を守るために戦った納西族の英雄であり、玉龍雪山の化身ともいわれる。前述したように黒龍潭へ集まる水はすべて象山から来るが、玉水寨の看板に「古城遡源」の文字があるように（写真1）、納西族の人々は麗江古城の水は神泉から来ると信じている。写真31に写っているように、納西族の人々の「心」には、玉龍雪山の水が地下水となって黒龍潭へ湧き出していると「見える」のである。それは、バリ島の人々が、ウブドへ流れてくる水の源が神の降りるバトゥール湖からの地下水であると信じていることと同じである。実際は、バトゥール湖から漏れた地下水はその河川水の7%しか占めていない（榎根，2002）。インドでも、バリ島でも、そして麗江でも、人々は、自分たちの周りにある自然（特に水）を神として信仰した。そして、人々は神すなわち自然と相互作用を繰り返すことによって「心」をつくり上げた。ケン・ウィルバー（2002）の「自然は心をつくる部品である」



写真31 黒龍潭から見た納西族の主神玉龍雪山

という言葉は、和辻哲郎が『風土』の中で述べたと同じことを意味している。

宗教：納西族は「万物には永遠の魂があり、その魂はそれぞれの生涯において様々な命と結びついていると信じて」（字坊 RED, 2005, p. 62）いる。彼らは、魂の転生はすべての生きものの間で行われ、動物も人間もすべて平等だと考えている。この考えはインドのヒンドゥー教徒の考えに近い。納西族にとっては、命あるすべてのものが神である。彼らはこの地方に長い間伝えられてきたこの東巴教を信じているが、同時にチベット仏教、道教、儒教も受け入れてきた。納西族の宗教活動は、内面的な信仰としてよりも、渡辺（2005）が述べているように、外面的な「行為」として行われてきた（林，2003）。

開かれた心：納西族の心を示す一例として、楊

さんの話をしてみたい。楊さんは私たちが麗江調査で雇い上げたタクシーの運転手である。彼は私たちの調査を熱心に手伝い、私たちの調査目的を知って、「私の家にも古くから伝わる、枯れたことのない泉があるので」と言って、私たちが獅子山の山腹に建つ彼の家へ夕食に招待してくれた。彼はもと軍人で、獅乳泉（図4の⑯）の所有者の楊家へ婿に入った。小学生になったばかりの娘が一人おり、妻の両親と5人で暮らしている。家では、要望があれば獅乳泉の水（写真32）を使ってプーアール茶を淹れる観光客相手の茶道の実演と飲茶のサービスも行っている。泉に供えられた線香の写真33から、泉が祈りや感謝の念を捧げ



写真32 個人の屋敷の中にある獅乳泉
(四角に切り込んだ下から地下水が湧き出す)



写真33 獅乳泉に供えられた線香

る場でもあることが分かる。彼の妻と義母は私たち3人のために一所懸命にご馳走をつくり、家族全員でデザート付きの夕食を共にしてくれた。この時の会話で実感したのが納西族の「開かれた心」である。麗江古城に城壁がないように、納西族の心にも扉はない。楊さんだけでなく、納西族の人々はだれもが親切だった。このような「開かれた心」は、彼らの自然観や価値観とも関係しており、かつて旅人をもてなした心に通じるものがあるのではないかと思われる。その「心」が今は古城を訪れる観光客の心を暖めてくれる「資源」になっている。人の「心」は見えないが、でも見ようと努力すれば見えてくるのである。

殉情物語：東巴文字で綴られた、長いあいだ詠うことを禁じられてきた物語に『殉情物語』（字坊 RED, 2005）がある。納西族では約100年前まで瀘沽湖の摩梭人のような母系社会が強く残っていた（榎根ほか, 2006）。財産は母親から娘へと受け継がれ、自由な恋愛や、男性が女性のもとへ足を運ぶ「通い婚」も一般的だった。しかし納西族は極めて感情を大切にする人々で、相手は常に一人で、うまくいかなければ別の相手と付き合うが、複数の相手とは同時に付き合わなかった。相手を選ぶ権利は女性にある場合が多かった。しかし「改土帰流」によって、漢民族の婚姻制度が導入され、一夫一婦制が法律によって義務づけられた。改土帰流後の婚姻制度では、結婚した女性が他の男性と付き合うと不倫になってしまう。「ナシ族はすべての生物は神様であり、人間は愛情を抱きながら生き、そして死んだ後、人々に葬儀を執り行ってもらい、神様になるための道を歩めると考えていました。しかし、不倫した女性は、その倫理に反した行いによって、死んだ後に葬儀を執り行ってもらえません。葬儀を行ってもらえない人間は、神様になれず、さまよう魂、つまり鬼となってしまうのです」（字坊 RED, p. 75）。

改土帰流による一夫一婦制の導入によって、愛情に生きた者が天国へ行けず、神様になれないと

いう矛盾が生じた。そして、それを解決するために「第三の樂園」と「殉情死」という概念が生まれた。それは、親の反対で結婚できない男女や、不倫関係に陥った男女は、愛する者と一緒に殉情死すれば、天国でも地獄でもない、第三の樂園へ行けるという考えである。そこは想像を絶するほど美しく、何の争いもなく、永遠の命を手に入れられる安らかな場所と考えられた。そして改土帰流後、多くの男女が殉情死を遂げた。最近、ヨーロッパでは婚外子の比率が高くなったと報道されている。近代科学の知が絶対的なものではなかったように、一夫一婦制も絶対的なものではない。ボストン美術館と麗江の東巴文化研究所の2セットのみしか現存しないとされる、東巴文字で書かれた「殉情物語」の原典を、日本人にも理解できるように和訳したものが『殉情物語』の第一章である。この本の最後に訳者は次ぎのように述べている。「私はずいぶんと長い間、殉情物語を翻訳することができませんでした。それは、私自身、ナシ族に対する誤解があったからです。この物語の背景にある、ナシ族の思想、社会の仕組み、そして取り巻く自然環境を理解して、初めてこの文章が翻訳できたのです」と。

伝統的な民族行為の背後には思想があり、思想の背後には、その思想を培った伝統や「環境」がある。「環境」と関係するものごとの真の姿は、全象限的アプローチを採用しなければ見えてこないことを、『殉情物語』の翻訳者である王超鷹は語っている。山西省の五台山で見られたように、宗教施設は自然環境の保存に大きな役割を果たしてきたが(榎根, 2005)、麗江の宗教は納西族の「心」の保存に大きな役割を果たしてきた。

9. まとめ

表1と表2を見ながら現時点でのまとめを行ってみたい。自然と人間は、分離できるものでもないし、対立すべきものでもない(榎根, 2006)。

このことは納西族の生き方からも明らかである。そのような考えをもつ納西族のつくり上げた「水のまち麗江古城」が、いま観光資源として、中国人だけでなく世界の人々の注目を浴びている。私は、雲南省は「中国の希望の土地」であり、麗江古城は「中国の宝石」であると考えている。過去の麗江古城では、自然と人間のあいだに深刻な矛盾は存在しなかった。それを「四象限の調和が保たれていた」と表現することもできる。納西族の民衆にとって麗江古城は、最初は木氏から「付与された空間」であったが、そこに代々居住して水の流れの中で経済活動を行う過程で、その「付与された空間」は「居住する空間」へと進化し、水への信仰がさらに強まり、独自の水文化が形成された。いま観光客が麗江古城に惹きつけられるのは、麗江における「四象限の調和」を、彼らが心地よいものと感じるからであろう。

しかし、すでに「雲南大地震の前には水はすこし汚れていた」という言葉からも推察できるように、近代化の影響は麗江古城にも確実に及び始めていた。雲南大地震後に立てられた地域計画を実行することで、一応この危機は乗り切ることができたかに見えるが、急激に増大する観光客と、それを当てにする観光業者による観光開発は、すでに麗江古城から「生きた地域社会」を消失させつつある(朱, 2006)。

今後、地域の共同体組織と、かけがえのない麗江古城の環境を守っていくためには、何が必要であろうか。それに対する答えは、物質的な技術の発達や、金儲けのための観光開発に払うと同じほどの注意を、意識や心の発達にも払わなければならないということである。言い換えれば、麗江古城の「次なる社会システム」の構築にあたって、全象限・全レベル的アプローチが必要だということである。納西族の伝統が生み出した「観光資源」を、金儲けのためだけに「観光資源」として消費すれば、その「資源」はやがて無くなってしまう。いま中国では、先行した沿海部と内陸農村部との

間の経済格差が広がり、それを解決するために「西部大開発」が進められている。私たちが行った麗江古城の調査事例は、中国の西部大開発にとって真に必要とされていることは、先進国がかつて行ったような、近代科学技術を駆使してエネルギーと物質を「資源」として大量に消費し、自然すら「自然資源」として消費してしまうような「急激な開発」ではなく、少なくとも水に恵まれた、少数民族の多い雲南省では、少数民族の伝統的な叡智を生かした「ゆるやかな発展」を行うことであろう。私たちはそのような「ゆるやかな発展」の方に、中国内陸農村地帯の明るい未来を見る。

清水博（2003）は次のように述べている。産業資本主義経済社会という、欲望を増殖する巨大装置 mega machine から降りる方法は、「(1)システムに流入するエネルギーを減少させて、欲望の自己増殖機構が実質的に働かない状態をつくりだすこと、(2)拘束条件（精神的拘束条件、社会的拘束条件）を変化させて、グローバル化したマネーの流れへ集中しているエネルギーをほかの自由度へ拡散させることである」（同、p. 79）。これとほぼ同じ内容の「声明」を日本学術会議（2000）がすでに出しているが、その日本学術会議自体が、近代科学の価値中立性に縛られて、そのような「声明」を出したことについて自己批判したことについて

は、すでに第1論文で述べたとおりである。さらに清水は、次のように述べている。「私にとって意味のあることは認識ではなく、存在である。それは、何を、どのように実践することが、私たち全体の存在にとって善いことなのかを発見することであり、そしてどうすれば、その善いことが私たちに嬉しいことになるのかを発見することである」（同、p. 165）。

中国が目指している「小康社会」や「和諧社会」は、清水の著書や日本学術会議の「声明」が目指していることと、ほとんど同じである。天与の水に恵まれた交易都市麗江古城やバリ島の稲作社会（榎根、2002）は、「発達レベル」の初期段階としては、四象限の調和が見事に保たれていた好例である。しかし「すべては生成・進化するシステム」である（榎根、2006）。麗江古城やバリ島の稲作社会が、進化の過程で「発達レベル」を一段上げたとき、その段階でも四象限の調和を保ち続けることができるか否かは、これから、全象限・全レベル的アプローチによって「次なる社会システム」を構築できるか否かにかかっている。

なお、麗江古城とは地域条件を異にする（例えば）山西省の環境問題については、別途に研究が必要であることは付言するまでもない。

（本稿の写真はすべて榎根勇撮影）

引用文献

- 愛知大学国際中国学研究センター編（2005）：中国における環境問題の現状。愛知大学21世紀COEプログラム2004年度人口生態環境問題研究会中間報告書、愛知大学国際中国学研究センター、341p。
- 愛知大学国際中国学研究センター編（2006）：中国が進める循環経済と環境政策。愛知大学21世紀COEプログラム2005年度人口生態環境問題研究会中間報告書、愛知大学国際中国学研究センター、307p。
- ウィルバー、K.（2002）：万物の理論——ビジネス・政治・科学からスピリチュアルまで。トランスビュー、317p。
- 岡田尊司（2005）：脳内汚染。文芸春秋、313p。
- 榎根勇（2002）：水と女神の風土。古今書院、335p。
- 榎根勇（2005）：中国山西省フィールドワーク記録。愛知大学21世紀COEプログラム2004年度人口生態環境問題研究会中間報告書『中国における環境問題の現状』、pp. 295-313。
- 榎根勇（2006）：自然と人間の統合——文理融合への一つの試み。愛知大学国際中国学研究センター（本報告書）。
- 榎根勇・宮沢哲男・朱安新（2006）：麗江古城の水と社会。水利科学 No. 291, pp. 41-72。
- 榎根勇・藤田佳久・宮沢哲男・大澤正治・朱安新（2006）：雲南省調査報告。愛知大学21世紀COEプログラム2005年度人口生態環境問題研究会中間報告書『中国が進める循環経済と環境政策』、pp. 211-251。
- 朱安新（2006）：雲南麗江地区の水環境に関する社会学的考察——地域社会が抜けつつある世界文化遺産の麗江古城。

- 愛知大学21世紀 COE プログラム2005年度人口生態環境問題研究会中間報告書『中国が進める循環経済と環境政策』, pp. 253-262.
- 清水博 (2003) : 場の思想. 東京大学出版会, 237p.
- 字坊 RED + 王超鷹 (2005) : 殉情物語——トンパ文字に秘められた愛の物語. 技術評論社, 205p.
- 徐霽 撮影・編著 (2001) : 雲南図典. 雲南人民出版社, 270p.
- 中国国家地理 (2006) : 風水專輯——風水 中国人内心深处的秘密. 中国国家地理2006年第1期 (第543期).
- 日本学術会議 (2000) : 「人間としての自覚」に基づく「教育」と「環境」両問題の統合的解決を目指して——新しい価値観に支えられた明るい未来の基盤形成. 学術の動向第5巻第7号, pp. 21-31.
- 林維東編 (2003) : 納西紙書. 世界文化遺産麗江古城保護管理委員会企画, 雲南美術出版社発行, 80p.
- 樊炎冰編著 (2005) : 中国麗江古城. 中国建築工芸出版社, 489p.
- 李汝明総纂 (2001) : 麗江納西族自治県志. 麗江納西族自治県志編纂委員会, 1049p.
- 渡辺欣雄 (2005) : 「術」(手段)としての宗教——中国民俗宗教のシステム理解のために. 中国南開大学歴史学院・日本愛知大学国際中国学研究中心編, “現代中国学方法論及びその文化視角” 国際学術討論会『会議論文集』, pp. 4-6.

追記 p. 109の図6は、Aは獅子山と金虹山、Bは象山を想定して描いた仮説である。この仮説は、その後日本へ持ち帰った水の水質分析によって証明された。すなわち⑩⑪⑫の3つの湧水のカルシウム含有量 (mg/l) は、順に37.80、75.03、81.28であり、流動距離が長く、岩石との接触時間の長い水ほどカルシウム分が多かった。この水質データの提供者は宮沢哲男教授であり、水質分析を行ったのは元愛知大学文学研究科社会システム専攻（地理学）の大学院生、足立賢一君である。記して謝意を表す。